■大学・学部と附属学校との共同研究■

熊本大学教育学部・教育学研究科と四附属学校園との共同研究について：カリキュラム改革への取組み

熊本大学教育学部 副学部長（附属学校担当）　藤田　豊

１．はじめに

熊本大学教育学部四附属学校園では，新学習指導要領（及び幼稚園教育要領）を念頭に，授業と保育の改善，カリキュラム改革，教育課程改革等に取り組んできている。それぞれについて共同研究の視点から現況報告を行う。

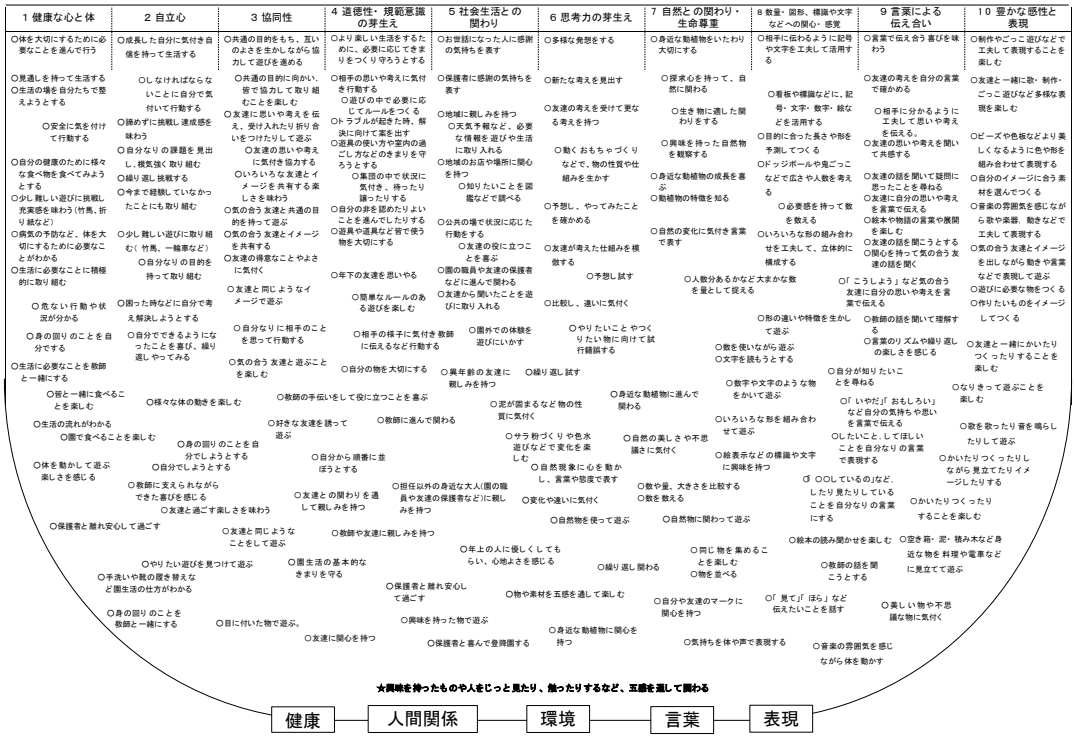
２．附属幼稚園の取組み：保育の評価システムを創る

附属幼稚園では，昨年度までの３年間,「幼児期にしっかりと遊び込むことで自ら学ぶ子どもになる」という考えに基づいて，幼児期の学びを小学校以降の学びへとつなぐことを意識した教育課程を目指して研究を進めてきている。指導計画作成の際に見出した幼児の発達の道筋を基に，指導計画のねらいや内容の検討を繰り返し，新教育課程が編成されている。本年度は，評価の妥当性や信頼性が高められるように新たな評価指標を作成し（資料１参照），幼児期にふさわしい評価の在り方を工夫することで，幼児理解を深めることと，評価に基づく指導の改善を明らかにすることを目的とした研究が展開されている。

学部教員（主に教職担当）も定期的に研究推進委員として参加し，５領域（健康，人間関係，環境，言葉，表現）にわたる子どもたちの学びや育ちの変化を，先の評価指標に基づき多面的に評価する方法について意見交換をしている。今後，さらにこの作業が進展することで，幼児期の子ども一人ひとりの育ちの「いま」を見つめ,「育ってほしい姿」に向けて，求められる保育とその評価システムについての共同研究が進む予定である。

（資料１：附属幼稚園で開発中の評価指標のイメージ図）

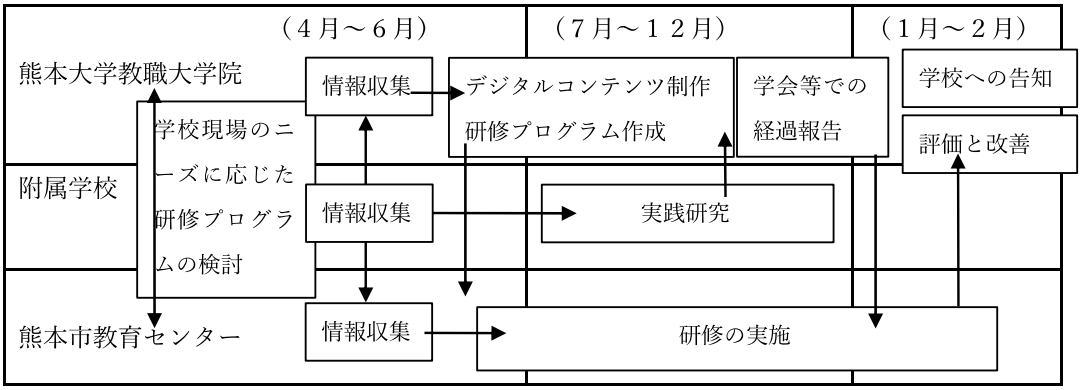
評価指標イメージ図（平成 30 年 8 月作成）



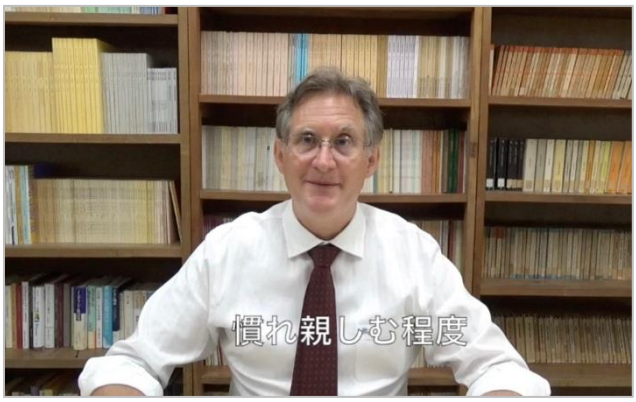
３．附属小学校の取組み：授業研究の成果を地域に還元する

附属小学校では，現実の世界で実践する学びの文脈に近づけながら，子ども自身に学習の目的や方法に係る見通しを明確に持たせ，解決に向かう思考を自分たちで展開できるような授業の実践研究に取り組んでいる。授業では，子どもが学びの主体となってお互いの疑問や考えを自由に表現し合う「対話」を大事にし，そのことによって，子ども自身のなかで知識やその概念的理解が洗練されて行くような深い学びの実現を目標としている。毎年２月に開催される研究発表会では，学部教員も教科ごとに助言指導者等の役割を担い協力体制を築いている。今年度からは，教育学研究科（教職大学院）の実務家教員（附属小学校勤務経験者）が先導する形で，学習の基盤となる資質・能力としての言語能力や情報活用能力に焦点化し，附属小学校と熊本市教育委員会（教育センター）との協働で，教員研修のためのデジタルコンテンツの開発にも取り組んでいる（資料２参照)。その一例として，附属小学校の外国語科（６年）の授業では，子どもがよく知っている内容（じゃんけんする際の掛け声や拍子の取り方，勝ち負け引き分けの数の数え方，故郷を想う歌の合唱等）を扱いながら，言葉や文化の違いが特徴として現れる授業風景に研究者（ネイティブ）教員の理論的説明も加えたデジタルコンテンツが開発されている（資料３ab 参照)。教育センターでの検証作業を経て，ICT を活用した公立学校の教員向け研修プログラムに組み込まれる予定である。

（資料２　共同研究の組織とその機能の関係図）



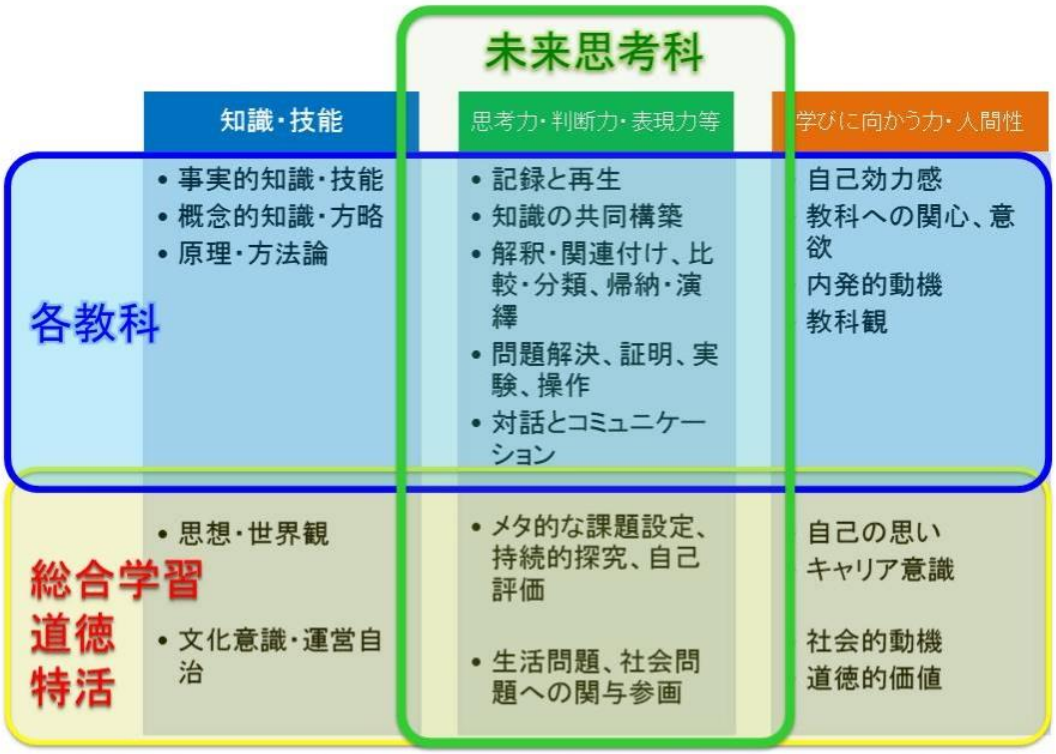
（資料３ab　附属小学校外国語科授業と解説の一コマ）



４．附属中学校の取組み：学習の基盤となる資質・能力を育む教科横断的実践研究

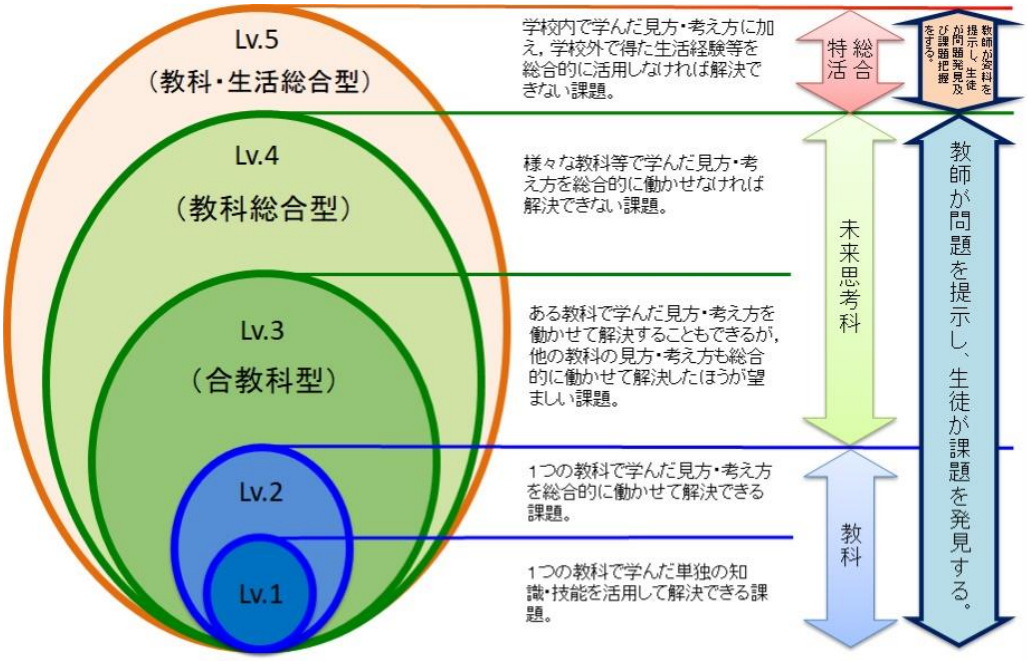
附属中学校では，イノベーションによる新たな社会創造（Society5.0）やグローバル化，情報化による急激な社会変化に対応するために，平成２６年度から文部科学省から研究開発校としての指定を受け（H26-27, 29-30），子どもたちに未来を拓く力を育成するためのカリキュラム（新教科：未来思考科）の開発に携わってきた。未来思考科で育てる「思考力」を“一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えを持って，他者と話し合い，考えを比較したり吟味したりして統合し，よりよい解や新しい知識を創り出し，更に次の問いを見つける力”と捉え，新学習指導要領が示す資質・能力の３つの柱がバランスよく育まれて行くようにデザインされている（資料４参照）。具体的に授業の中で取り扱う思考力は３つの要素（論理的・批判的思考力，問題発見解決力・想像力，メタ認知力）から構成され，カリキュラムマネジメントの視点（教科のなかで学んだ知識を活用し解決する課題，教科間で学んだ知識を総合的に活用し解決する課題，学校内・外で獲得した経験や知識を総合的に活用しながら解決する課題）に立った授業作りを学年ごとに行った（資料５参照）。そして，未来思考科による学習効果について検証を行っている。本研究は，附属中学校が主導する形で実施され，本学部からは研究指導員として学部教員（教科担当）が参加する形で進められている。

（資料４　未来思考科の枠組み）



参考:「今求められる学力とは－コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影」日本標準ブックレット、石井英真(2015)

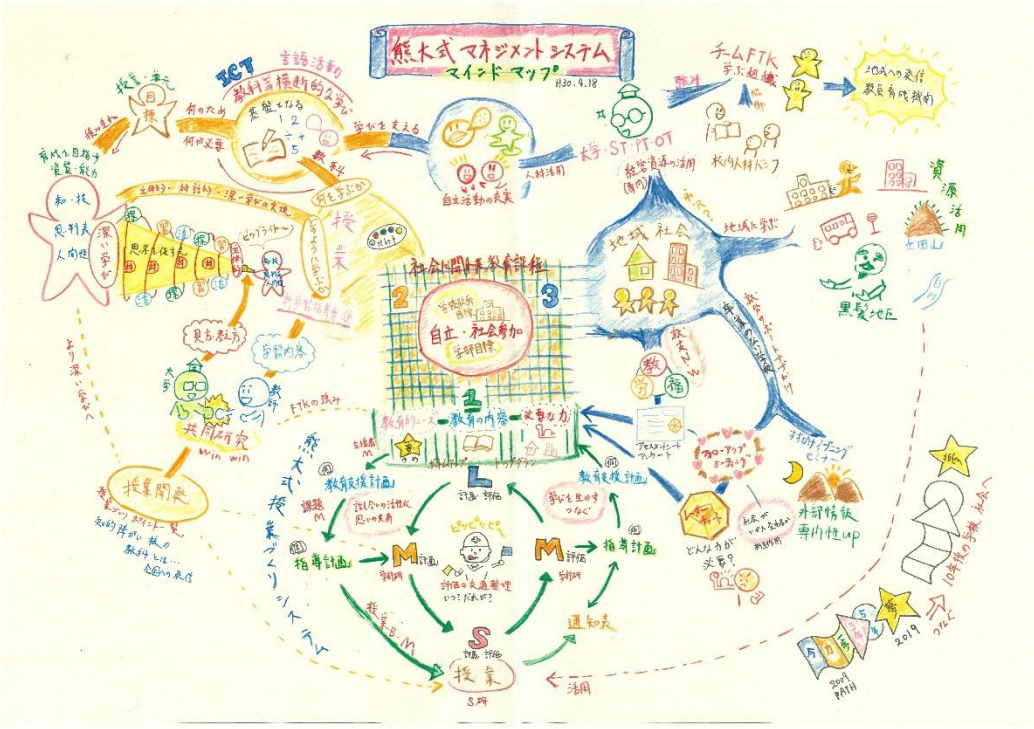
（資料５　教科横断的観点からみた学習課題と未来思考科の位置づけ）



５．附属特別支援学校の取組み：１０年間にわたって取り組んで来た教育課程改革

附属特別支援学校では，子どもたちの夢や希望を実現するために授業づくりのあり方や個や障がいの特性に応じた指導内容・方法の研究，教育的ニーズと新学習指導要領を見据えた子どもたちの学びを基盤にした今後の特別支援教育のあり方を考えた実践研究への取組みを行っている。研究は大きく３つの柱（１）カリキュラムの充実のための熊大式マネジメントシステム開発，（２）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善，（３）地域社会（福祉労働等）との連携強化，から構成されている（資料６参照）。（１）は，学習指導要領に基づき，教科横断的な視点から子どもたち一人ひとりの夢や希望の実現にむけて段階的にミーティング（支援者，課題解決，授業ベース）を行いながら，子どもに合った授業や教育支援活動を教員皆で話し合って実施し，その効果を評価するシステムを作り，次の授業や活動の修正に繋げて行くものである。（２）は，小学部，中学部，高等部ごとに，主体的な学び（学びへの興味関心，学びの見通しや必然性，学びの振り返り），対話的学び（子ども同士の協働や，教職員や地域の人との対話等を通じ，自己の考えを広げ深める），深い学び（学びの深まりや拡がり）を実現させるための授業作りに取り組むものである。（３）は，就職支援ネットワーク会議を設置し，地域のモデル校として，教育・労働・福祉等の関係機関が連携・協働することにより，本校および地域のキャリア教育や就労支援体制を充実させるように取組むものである。平成２１年度に始まった附属特別支援学校の教育課程改革は，教員皆が同じ方向に向かって子どもを指導・支援するチーム・アプローチで，教育学部特別支援教育教員養成課程の教員との協働により（１）に取組むことからスタートしている。その後，（３）の地域の教育・行政機関との緊密で強固な連携構築へと発展し，昨年度からは教育学部の教科教育，教職（教育学・心理学），特別支援教育を専門とする教員も共に協働しながら（２）のカリキュラム改革を展開している。10 年前に立ち上がった本プロジェクトでは，資料７に示す 10 年後の附属特別支援学校の姿が描かれている。当時思い描いた未来の姿が，これからの子どもたちの夢や希望の実現にも繋がっていくように，附属特別支援学校と学部・研究科との共同研究の更なる発展を期待するものである。

（資料６　附属特別支援学校の研究の３つの柱のイメージ図）



（資料７ 附属特別支援学校の１０年後の姿（2009 年作成））

熊大附属特別支援学校の 10 年後（2019 年）　～未来の作戦計画～（一部）

ポラリス（「10 年後の附属はこんな学校になっていてほしい」という夢や希望）としてあげられた事柄（一部）	
附属学校として ・研修機能 ・研究機能 ・教員養成 ・教員集団	□「附属」は教員が研修する場として研修的役割を担っている □附属自身が“ポラリス”になる ・方向性，（大学との）地理的利点を生かす，（大学との）有機的臨床研究・大学と連携することでウリモノを探す，プレゼンスができる，西日本３指に入っている
先進的教育の実践の場 ・一人一人の子どもに応じた指導の充実 ・システムの充実	□子どもの特性にあって様々な学習ができる場 □多様な障害種の子どもたちを受け入れている □10 年後を示せる学校 ・専攻科，幼稚部ができている・校内の移行支援が充実している ・小中高一貫教育がなされている ・学齢制を変え，個にあわせた学習がなされている □ISO 的品質保証がなされた学校になっている学校特有のシステム（ニーズの把握の仕方，保護者への説明責任，地域，ある程度レベルのある）があり，子どもにとっても保護者にとっても魅力的な学校になっている ■本を出版している
研修機能の充実	■全国的な専門家を呼んで定期的研修会を開いている □公開研究会は中身の濃いものになり，多くの人（300 人はいる）が集まっている
大学と連携した進路保障	□特別支援学校進学先として大学の特例子会社ができている ■中度・重度の障害がある子どもたちが大学に就職している
卒後アフターケア・すずかけの会の充実	□すずかけの家が同窓会館になっている ・NPO が立ち上がり，アフターケアセンターとして同窓生が集える場となっている
センター的機能	□早期の子育て相談所 □地域にとっての駆け込み寺（附属にいけばなんとかなる！難しいケースの教育相談をしている）
施設設備	■綺麗な校舎になっている □学校に図書館がある，または，子どもたちが大学の図書館を利用できる

（干川隆(監修）熊本大学教育学部附属特別支援学校編著　2012 年　ポラリスをさがせ～熊大式授業づくりシステムガイドブック～（ジアース教育新社）より抜粋）

６．むすびにかえて

以上，各附属学校園の教育研究への取組みと学部・研究科（教職大学院）との共同研究の現況について報告させていただいた。今後は，各学校園の教育全体を支える共同研究のあり方や学部・大学院教育の質を向上させるための共同研究のあり方について一層の吟味・検討が課題である。